
未来日記パラレル(「未来日記」二次創作)

ray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来日記パラレル（「未来日記」二次創作）

【Nコード】

N3915BA

【作者名】

ray

【あらすじ】

未来日記の二次です。

二次は初めてですが、お願いしますm(_____)m
パラレルなどといったちょまえに横文字なんぞ使っていますが、どちらかというと、もしも的なこうだったらいいのに的な気持ちでやっています。

かなりざつくりと言つと概ね原作準拠ですが、細々とした変更はその都度前書きにて提示したいと思います。

読んだよー的なのとかよかったよー的な感想など気軽に頂ければ
幸いですm(____)m

あと、何分至らぬ所しかございませぬので、他にもダメ出しも頂
ければ非常に嬉しいですm(____)m

pixiv他にて重複投稿予定

選択1（前書き）

活動報告で言っていた作品が行き詰まり、気分転換に進めていた
らいつの間にかこっちの方が一段落ついているという不始末、一体
どれほど転換していたというのか。

本物語は原作2巻終わり寸前から開始で、それ以前は原作通りで
す。

選択1

春日野椿は、信者に取り押さえられた天野雪輝の唇に、自身のそれを重ねた。

そして、彼の閉ざされた唇の隙間を割って舌を挿入した。

我妻由乃へ向けられた挑発的な眼差し。およそ愛し合う者どうしの行為からは酷く遠くかけ離れたキス。口腔内へ侵入した舌は、雪輝のものを一方的に犯した。

始終彼女のなすがままにされていた雪輝だが、彼には椿のその行為が、酷く自虐的なもののように感じられた。唇や舌の感触は酷く曖昧なのに、なぜかそれだけは確かだった。

椿が唇を離す。雪輝の下唇と椿の舌を、だらしなくたわんだ唾液が繋ぐ。その間も視線は由乃を捉えたまま。

信者たちに捕えられたままの状態の由乃は、驚愕に目を限界まで見開いた。体は小刻みに震えている。

ザザーッ。

タイミングを見計らったように日記から未来が書き換わる音がした。椿はその音をはっきりと聞いた。

「さて、これでようやくDEAD ENDも消え……」

視線を自身の日記に移す。日記が紡ぐ新たな未来は。

「え……？」

彼女の日記には依然、DEAD ENDの文字が。

「そんな……馬鹿な……。未来は確かに書き換わったはずなのに！」

焦りのままに声を荒げる彼女は、日記の詳細を目で追った。

そして、我が目を疑った。

「これは、一体どういう……!？」

顔を上げると、椿はなぜか雪輝を見た。

しかし、この場で彼女がそれ以上日記の詳細を考察する時間はなかった。

「ユツキーをおお……汚すなあああああ!!！」

信者達の拘束を振り払った由乃は、椿に向かって弾丸のような速度で駆けた。

「馬鹿な！ 大の大人が二人がかりで組み伏せてたのよ!!！」

椿の焦りも意に介さず。由乃は速度を殺すことなく、近くにいた

信者から斧を奪い取り、勢いそのままに大きく振りかぶり椿に切りかかった。

「死つ、ねええつつ!!!!」

マズイっ！ 日記を守らないと………！

無音だった。何もかもが。

それを目の当たりにした者たちや、それを取り囲む環境の一切が停止したような、無音。

雪輝。

信者達。

由乃。

そして、当の椿さえも。

ボト。

無音の中に微かな音が咲いた。まるで何かの冗談のようなアクセントだった。

音のした方を、まるでこの世のものではないというような風に見つめる椿。

床に転がる自分の右手首。

それを見て初めて、自分の手が由乃に切り落とされたのだということを理解した。

痛みは、それに遅れて訪れる。

「あああああああッ！！ 腕が……腕があああああー！
—————！！」

無音は断末魔の叫びで破られた。

滑らかな切断面からは血がとめどなく流れ出てくる。

由乃はそのまま雪輝へ向き直ると乱暴に斧を振り、信者達を彼から引き剥がす。

そして自分の未来日記を預けると、雪輝を渡り廊下から庭へ突き落とした。

「私の日記を見ればユツキーはきつと大丈夫だから。逃げて！」

それを最後に、今度こそ由乃は信者達に取り押さえられた。

「我妻は捕まり、雪輝は逃亡……。俺たちもいずれ見つかるとして、頼みの応援も絶賛足止め中か。こりゃ全滅かな」

屋根瓦の上に身を潜めて、雪輝たちの動向を追う来須とみねね。二人は互いの腕を一つの手錠で繋いでいる。

スプリングクローを作動させた来須はそのまま地下牢へと潜り込み、今まさにそこから脱出しようとしている雨流みねねと鉢合わせた。先述の方法で彼女を拘束した来須は、信者の目を避けて、二人でこの屋根の上に辿り着いた。

「全滅かな、じゃないわよ！ さつさと手錠こたを外しなさいよ！ 刑事と共倒れなんて無駄死にもいいところだわっ」

12thから解放され、ようやくこの忌々しい宗教施設からおさらばできると思った矢先に、今度は4thに付き合わされる羽目になって、片手が不自由な状態でこんな屋根瓦の上にまで登らされたかと思いきや、4thの全滅発言である。9thの苛立ちもさもありなん。

「冗談じゃねえ。んなこと勝手に決めつけんな。あたしにはこんな状況にあつらえ向きな日記があんのよ。滅ぶんならてめえ一人で滅びな。」

だから手錠を外せってんだ。

「いいだろう。交換条件付きなら外してもいいぜ9th」

みねねの怒りも無視して、少し考えた後に来須はそう言った。

……え？

「？ 交換条件!？」

確かに手錠を外させたいのでそうやって言ったのだが、条件付きとはいえ易々とそんなことを言っただけのける来須を気持ち悪く感じ、みねねは訝しがるような、彼の真意を探ろうとするような微妙な表情を浮かべた。

そして来須が、その真意ともいえる条件を提示した。

「んっ、ああああ……」

お目方教本部内の一室。椿はそこで手当てを受けていた。もっとも、手当と言っても腕が切断されているとなれば、手元にある医療器具だけでは根本的な治療は到底望めない。信者の中に医学に明るい者が居たというのがせめてもの救いである。

切断された右手は、この部屋にはなかった。

由乃は椿たちのいる一室に至る廊下にて大勢の信者によって拘束されている。先ほどのように振りほどかれるという可能性は、ほとんどないと思われる。

「視える」「世界と」「視えない」「世界。」

いつもだ……。

私を苦しめる者はいつも「視えない」「世界からやって来る。」

たとえ今のような状態であっても、長い間に亘って行われてきた儀式のせいですれ以外の時に男性信者に触れられるというのは、椿にはどうしても受け入れられなかった。

「
方様」

件の男性信者に指示を仰ぎながら、一通りの処置を施し終えた信者、美神愛が呼んだ。

しかし、椿は痛みに耐えるようにして歯を強く噛みしめながら、自身の忌まわしき過去を思っていたために気付かなかった。

「……お目方様っ！？ 失血がひどすぎます。これじゃ命に……！」

語気を強めた愛の二回目の呼びかけで、椿は今、そして未来を取り返した。

止血はほぼ完成したが、それまでに失った血液はかなりの量になる。

「……うるさいわね……、これくらいイッ……へ、平気、よ……」

真剣に身を案じる愛の言葉にも彼女は意を介さない。

言葉にした所で我が身を取り繕うことができないというのが現状だ。

体はガクガクと震え、呼吸は荒く、顔色は蒼白。いつものようなきちんとした正座ではなく、それを崩したような恰好で左手を畳に着いて、どうにか意識を保っているといった様子だ。俯いた顔、長い髪の間から、時折苦悶に必死で耐えるような表情が覗く。

誰がどう見ても平気とは思えない。

それでも、見え見えの虚勢を張ってでも、やり遂げなければならぬことが、今の椿にはあるのだ。

父と母が死んでから。

私はずっと教団のなぐさみものになってきた。私はその苦痛に、耐えてきたのだから。

あと、少し。あと少しだから……。

汗が、滴り落ちる。意識が揺らぐ。

このまま気を失えば、二度と目を覚ますことはない。そんな予感がある。

だから、何としても意識だけは保たなければならない。

それに。

こんな所でDEAD ENDになるわけにはいかない。

日記通りにDEAD ENDを迎えなければならない。

愛と、彼女と一緒に手当に携わった宮代お鈴という信者の力を借りて何とか立ち上がった椿は、途切れ途切れながらも、必死で言葉を紡いだ。

「今より……神託を、告げます」

千里眼日記のことは信者たちは既に把握している。だから、彼女は彼女の言う神託などという言葉はまやかしであるということも知っている。元よりそんな力が備わっていないことなど、自分が一番理解している。

しかし、予断を許さないという状況にあるにも拘らず あるからこそ、とも言える 放たれた懸命のそれには、不恰好ながらも自身を奮い立たせようとする強い矜持が込められている。

椿は千里眼の巫女として、春日野椿本人に対してその言葉を投げかけたのだ。

選択1（後書き）

サブタイを

文字数で区切るか

章で区切るか

どっちがいいのか迷っています。

次回は明日の10時を予定しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3915ba/>

未来日記パラレル(「未来日記」二次創作)

2012年1月10日10時53分発行